

飛んで火にいる

町田第三中学校 三年 小林 宗太

秋晴れの青空の下を無数の紙飛行機が飛んでいる。

地上での配達業が進化し紙飛行機の特性をコピーライティングして造られた紙飛行機型ロボットが郵便配達で空を飛んでいるのだ。

見た目も神秘的で美しい。

成功だな、と開発者の博士は満足気に空を見上げた。

しかし喜びも束の間、風の力を利用していることもあつてか、冬になり北風が強くなると、ロボットは空中でのコントロールが効かなくなり配達ができず、かといって風が弱いと紙飛行機の速度が出ず時間がかかつてしまうということが判明してきた。

「やはり紙飛行機の特性では弱かつたか。他に何か良い案はないだろうか」博士は研究室に籠るようになった。

そうしていくうちに季節は移り変わり、つぼみが花開くと、たくさんの虫たちが活発に活動し始めた。

「そうか、虫が良いぞ！ 力のある虫や飛ぶ虫、暑さや寒さに強い虫もいる。あらゆる虫の特性を合わせればどんな時でも配達できる良い配達ロボットができるかもしれないぞ！ そもそも虫は働き者だからな。」

博士はすぐさま研究に没頭した。

そうしてついに虫型配達ロボットが完成した。

雨の日も風の強い日も、それぞれコピーライティングされた特性を活かした虫型配達ロボットは大活躍だった。

また、空を飛んでいる姿はなかなか愛らしく幻想的で、街ゆく人々の評判も良く、博士もこれなら大丈夫と安心した。

暑い夏がやって來た。

虫型配達ロボットは今日も一日中せつせと働く。

そんなある日のことだった。

「博士、大変です！ ロボットたちの行き先がおかしいんです。いつせいに同じ方向へ向かい制御できなくなっています！」

博士は慌てて確認した。

「え、い、う、」とだ、今あつちの方向は花火大会の真っ最中だぞ！」

少し考え博士は気づいた。

なるほど、夏の虫の特性をコピーリーしゃれてしまったようだ。

真つすぐ飛んでゆく。

燃えるように光を放つ花火へ。

夏の虫たちは。

(759文字)

審査員講評 ****

出だししから情景がぱっと浮かび、ウキウキしながら読み始めました。時間の流れを季節と重ねて表現しているところも素敵で、物語の終わりには夏の景色や、それを眺める気持ちまで出来つてしまつても印象に残りました。

— KEN THE 390

市長賞
小林宗太「飛んで火にいる」